

-王様ライオン-

僕の持っているレコードでは、この歌の舞台は、サーカス場でもいいと思える。ライオンの登場、決してあわてることなくスラーシとぐらんと、それほもう堂々と何一つはびくたさることなくといった風にあられる。一匹あつた雄叫びのあとの「王様ライオン」「王妃ライオン」は、下唇にちかか直立不動のファンファーレを鳴らしているのびたないじ(ようか)。全体に、荘厳といった古くから中世位の王家を思ひ浮かべたおと下さい。

お気付きでしょうか。この曲、各小節、3及び4拍目は(とくに前半)1拍と2拍4分音不足ばかりで8分音不足や2分音不足が7拍、2拍とせよ。7拍曲のリズムは $\underline{\text{ホー}=\text{ホー}=\text{ホー}} \text{ホー}$ とおとす。このリズムをたが、この「ライオン」堂々行進しているように想像できる。

-「かくはらみ」-

相当陰鬱な感じがしよすし、やりきれなさもあり。さしほ一往命やじりよ、へこたれてはよかたないよ、さういうラバに愛の手を。や、い、い、「よれよれか」「も、と、働か、け」なととみちかたのほいよかに。

-象のワルツ-

ベースが中心で始まるというところ。 (男声) = 象を道想してこの曲はたかいかとみよす。この部分、コントラバスの「ドドドドド...」のファゴット「ホホホホ...」は、やはり楽器の音をおもいだしてさい。これ自分達も楽器になつて音を出す。という感じにしてさい。

-海のしづみ-

浜風 潮騒 夜 夜光虫 霧

海に行つた感じを感ずるのは誰にでもあつたこと「けれど」静かに(潜るに)一人丸でうく(タ「イ」のこのどはなく、横たあ、たまえ下へおとすかた)と無言にもかたわらさあ。あたたく包み込められうくたううとさう想像してはる人がいる。という風景。

-「ビー」-

鳥にたつたつていりあつと舞うよめり。空高くカタの森林全体を見渡す位置からその間を流れる大河のたつたつとつておとす。さうにこの河をのびる(ほくと小たつた流、おとすはれ、さうにペラッパつた(古い「あか」)のよなやつが「あー」と続いた中をほんの小たつた流人と、コ、テ、テ、クを見下してあの森をみい出して、さうに元気に動きまわっている熊(2匹位でしょうか)の「ビー」を想像してさい。曲の後半はさの「ビー」自身にたつたつていり「あか」の「あか」。

その後、手根を高く上げ、それと同時に、ゆっくり
断断と動き回るのである。『今年雪をいかに降して...』『ふもとの
森は...』等の曲。

—ピアノのおけいこ—

おけいこ途中が道は下で集まって何か話でもしているの
し。山おけいこの練習はみんなあまりうまくな
思っているけれど、それはまあ何とかがつらさ(体裁を考
『本当に熱心ね』など言っているけれど、それよりも同じように
やりはじめ、その手癖もやられたので、だんだん「かみ」表に
出てきた「(このビバークの言葉をいれよう)」と、なると
という感じでしょう。最後のササの「三三三三三三」はピアノの音
あ。そして、それ(小学校にあたり)の音ではありませぬので
おけいこはいい。

—化石の森—

早く(正午)の目からすると、恐竜の骨格がたいてい、と、たいてい
親近感がある可憐さ、というか、頭などで作りださ
感じはいいが、で、あの練習の時、僕もそれくらい出てきた
シーボルトというが、その骨格もそれいじりました。あの骨格も
実に愛嬌のある、オキナグサの奴でした。

—旅の白鳥—

幻想的、神秘的なイメージ、少し書き表しにくいこの「白鳥」
深く青い(碧い)水面(お水)に、一羽の白鳥が、浮かんでいま
頭をほんの少しもたげ、ゆっくりと大きく羽をのび、そんな優雅な
雰囲気、曲全体が、進行しているの、感じも、おもしろ。

—フィナーレ—

この曲に肉には何もありません。
架の最後、演奏会の打ち上げ... etc

☺
oio. これは僕のもつてい子動物のカーニバルのイメージです。
みなさんも、それ、それ、イメージのものを、あつて、し
このイメージを、とんとん、ふくらませ、この曲を
歌いましょう。

演出担当 伊崎正志